創立30周年記念特集

森林計画学会発足の頃*

西川 匡英**

林業統計研究会は、気取らず自由に参加できる雰囲気を持ち、若い研究者でも統計数理研究所などの一流の先生とも調査で接することができる研究会であった。小生も林業試験場に入ってまもなく、故西沢先生にくっついて当時統計研究会が行っていた文部省科研費「未開発林の調査と評価法に関する総合的研究」（近藤正巳教授代表）の調査に行き、そこで林知己夫、故石田正次、駒沢勉、大友栄松、平田種男、鈴木太七、大隅真一、木梨謙吉、高田和彦、北村昌美など偉い先生方に自然に接しご教示（学問ばかりでなくその他のことも）を受けたことが、その後の研究上いろいろな意味でどれほど糧になったか計り知れない。今は各大学で教授となって活躍しておられる方でも、当時はまだ新米の研究者で、助手、大学院生として参加しており、日光戦場ヶ原、九州九重山などの合同調査での交流を通じて知り合いになった方が多い。

林業統計研究会はそのようなある意味では和気あいあいとした気軽な研究会であった。したがって当時の研究会誌をみてもそのことがよく分かる。しかし時代の波は少しずつではあるが変化を求めており、立地懇話会が学会誌への手続きを進めていた。林業統計研究会でも主として大学の方から学会誌への移行を検討したらどうかという意見が出始めた。幸か不幸かその当時（1984—1987年）、統計研究会の事務局を受け持つ順番が林業試験場に回ってきた。3年間引き受けることになったが、学会誌移行の検討は重要な仕事になった。立地懇話会の様子を当時幹事をしていた宮川さん（林業

試験場土壌部）に聞きにいった。学会誌に登録するにはいくつかの条件をクリアする必要があるとのことで、まず学術会議で「学術研究団体登録申請書」なるものをもらってきて、必要な事項を記入し審査を受ければよいが、その時定款があるか、会員数が一定以上あるか、役員構成はしっかりしているか、会員は個人会費でまかなっているか、定期的に会報を出しているか、投稿規定は整備しているかなどが審査の対象となることが分かった。また学会誌登録には二つの過程があることも分かった。一つは、広報協力団体で、もう一つは、学術研究団体として登録することである。広報協力団体は学術会議が行ういろいろな活動に関する情報を受けることができるものの、学術会議委員への立候補や選挙の資格はないことが分かった。学術会議が認める正式の学会はこの二つのステップのうち後者までいかないとダメらしいことも分かった。ただ学術会議ではなにも区別はしていなくて（不躰にも電話で聞いてみた）、大学の方で勝手に決めているということらしい。

当時会員数は100名程度で後者の団体にいくには200名だったと思うが一定以上の会員数を必要とし、まだほど遠い状態であった。そこでまず広報協力団体に加入すべく一つ一つ片づけていくことにした。

確か東大の千葉演習林での夏期シンポジウムの時に定款や投稿規定を整備した。次の春のシンポジウムで協力団体への手続きの了解を図ったと思う。そのとき学会移行にともない、今までの和気あいあいとしたよい雰囲気がなくなるのではない

* Kyoei NISHIKAWA : My memories of the days when Japan Society of Forest Planning was inaugurated.

** 森林総合研究所 For. and Forest Prod. Res. Inst., Ibaraki 305

かと心配する意見があったのも印象的であった。1986年から、具体的には林業統計研究会誌11号より学会誌に向け論文の審査制度を設けることになった。

その当時といえば1984年には東大でIUFROのS4.04グループと森林経理研究会、林業統計研究会共催による国際シンポジウム「森林経営に関するユフロ国際集会」が成功裏に行われており、今にして思えばこの頃が現在の森林計画学会が国際的にも羽ばたいていく礎の時期であったようだ。

こうして1987年にはやっと日本学術会議の広報協力団体となった。このような流れの中で、1990年の学術会議第11期登録に合わせて会の名称を検討することが1990年の春の総会で決定された。この頃のことは当時の南雲秀次郎会長が「林業統計研究会の名称変更について」森林計画学会誌(16号, 254P)に詳しく書いている。運営委員会を中心に、準備作業が進められ、まず林業統計研究会の創設者先輩の意向を求めた後、会員から公募のうえ、総会で決定することとなった。公募は20あまりあったが、類似課題を整理するなどして森林資源計画学会、計量森林学会、森林情報システム学会、森林資源情報学会など5課題に絞った。

最終的には無記名投票により現在の「森林計画学会」に決まった分けであるが、今から考えても最適な判断であったと思う。

このようにして1990年学術会議(第15期)の学術研究団体として当時の木平運営委員長が6月末に登録申請を行い、9月には登録申請を認める旨の通知をもらった。ただこの最後の登録申請には会員数を倍増させる必要があったと思われ、木平運営委員長の並々ならぬ努力に感謝したい。この頃の心境を氏は、森林計画学会の発足一意志決定と合意形成に役立つ情報システムをめざして一と題して、森林計画学会誌(16号, 255-258P)に述べており、有名な森林計画のたて糸よこ糸論である。我々研究者が行う研究の集積はたて糸であり、よこ糸としての社会的な合意、認知を受けて真に役立つように仕向ける(織りなす)ことが森林計画学会の責務であろう。林業統計研究会発足から1988年頃までの活動記録は内藤健司氏が「林業統計研究会の活動記録」という題で林業統計研究会誌(14号, 184-197)に述べているが、森林計画学会発足後の展開については若手の研究者がいずれ総括してくれるであろう。小生の余生の楽しみの一つにしたい。

(1995年12月13日受理)